

F-3 欧州技術認証とCEマーキングー現状と展望

CSTBマーケティング・国際業務担当理事 ブルーノ・メジュレ

今日の午前中に既にお話をさせていただきました技術評価について、今度は、ヨーロッパの技術評価と、また、CEマークについて少しお話をさせていただくことにいたしましょう。

F-3資料スライド2

私どもCSTBとしましては、こうした技術評価という全体の事業の中において、どれがどのくらいなのかというところを見ていきたいと思えます。

スライド3

まずは、1,000万ユーロをテストが占めています。また、製品としての承認の割合が一番大きくて、それが1,800万ユーロという数字になります。そして、評価そのものは、ヨーロッパアグリーメントと技術認定ということになると、その2つをあわせて600万ユーロになります。ですから、国で実施しているアビテクニクという形での技術認定が550万ユーロ、ヨーロッパレベルで実施しているものが50万ユーロであることが、内訳としてこの2つの数字でご覧いただけたと思います。

スライド4

この10年ほどの長きにわたっての全体の推移は、このグラフでご覧いただけます。国内で行った承認の中でも、私どもCSTBの販売商品である技術認定（アビテクニク）の割合の青い柱が大きいことがご覧いただけたと思います。残りの色でこのグラフに表示されているものは、ほかの種類の評価手法でありまして、例えばそれが緑色のものになります。

2010年は少ないではないかと思うかもしれませんが、そうではありません。減っていません。この数字は2010年7月までの数字なので少なくなっています。

スライド5

全体的な趨勢として、きょうの午前中に当方の理事長から皆様にお話ししましたように、フランスとして、政策的なものによってローカーボンで進めようとか、環境グルネルといった新しい方針を打ち出しておりますので、そうしたものを背景として、私どもの評価についても少し様変わりしてきております。

つまり、そうした政府の方針によって一番影響を受けているのが、+42%の空調関係です。暖房や冷房、換気についてのものが増えています。同時に、太陽光発電は+45%です。断熱関連では90%も増えていることがわかります。また、断熱性の組付製品ということで、断熱材を内蔵した組み付けになると、技術認定が14であったものが19に増えているので+36%になります。

スライド6

この3~4年ですが、私どもにはいろいろな種類の評価手法がありますが、そういうものがどのように増えたり減ったりしているのかということを見てみると、やはりアビテクニクが2009年に比べて、この年末に増えていることがよくわかります。680、700という形での増え方が、この数字でもご覧いただけるからです。

この数字は件数です。それを申し上げるべきでした。

もう一つ、ヨーロッパにおける技術認定として技術アグレマンのやり方がありますが、こちら

は増えたかという、増えてはいますが、77だったものが83ということで、増えてはいるけれども、ある程度横ばい的に増えています。実は、欧州のガイドラインとして出たのは、89年、99年のことでした。10年たって97年に、こうした欧州レベルでの技術認定を行うようになって、それが97年。今や2010年ですが、それで急激に増えたということは特別なく、ある程度は増えているかなというくらいのところです。

スライド7

皆様から、特にCEマーキングについてもう少し焦点を絞ってお話ししてほしいということで、CEマーキングについての資料を持ってきました。

正確な数字は忘れましたが、100ぐらいではなかったかと思います。こうしたヨーロッパの技術アグレマンやCEマークによってカバーされているような計画や製品類、ファミリーが100くらいだったような気がします。もちろん、建築業界に限定してですが。

1997年に最初にCEマークがスタートしてから、実際にCSTBで出したCEマーキングが550、これは累積ですので、全体の数字としては、累積でこのくらいということになります。要するに、この中でもCEマークをたくさんもらっているトップ10のランキング表をお持ちしました。この下はというと、CEマークが付くような製品はあまりありません。

一番古くからあるものでは、アンカーボルトが数としても圧倒的に多くなっています。アンカーボルトについては、CEマークにしても、欧州の技術承認を最初に出したということで、ナンバリングとしても「001」とあるように、一等最初であることがよくわかります。97年にこれから始まりました。

それから、モルタルです。組積のためのものを組み立てていくときのモルタルということになります。次に、プレハブコンクリート。次に「ETICS」と書いてありますが、これは、外壁で断熱をほどこすという手法です。

CSTBとしては、こうしたCEマークについて、もともと欧州としては、いわゆるアグレマンテクニックということで技術認定していたものが、今度は、規格の調和が行われ、それでCEマーク表示の形になりました。

スライド8

アンカーボルトにつきましては、もともと欧州としてはアグレマンテクニックということで技術認定していましたが、ここは少し特別の例になります。つまり、欧州のこうした技術認定が、その結果、アメリカでも認定されることになりました。つまり、テストも同じ、評価も同じということで、アメリカと全く同じ認証をする例として、笹井さんとはWFTA Oの席でもお話をさせていただいたとおりです。

スライド9

アビテクニックとしても、どちらかというとな新規的なものについてのアビテクニックということになりまして、その場合に多いのが断熱系のものです。例えば、断熱系でイノベティブなものということで、木材ベースのセルローズ系の断熱材、また、太陽熱パネルということで、これによって給湯設備もその対象になっています。

スライド10

それから、イノベーションパスはごく最近できたもので、こちらは、いわゆる事前認定、プレ評価という形になりまして、保険屋さんは、それでよいと承認しているもので、始まったのが2008年です。

スライド11

その数は、実際の扱った件数ではなくて申請件数でお出ししていますが、それがものすごく増えていることがご覧いただけると思います。

このようにいろいろお話ししてまいりましたが、この先はどうなるかということにお話を進めたいと思います。実は、1980年代の終わりに、人によっては、今後はみんな欧州レベルでの評価になって、各国での評価はどんどん欧州にとって代わられることになって、各国評価はなくなるのではないかとされていた時期がありました。ところが、今こうして皆様にご覧いただいているカーブを見るとわかるように、それとは逆であることがよくわかりいただけると思います。

スライド12

これからの技術評価が今後はどうなっていくのか、この未来予測をしてみようと思う場合には、このあたりでそうした幾つかの要素が出てくると思います。

いずれにしても、はっきり言えることは、欧州レベルでの評価であろうと、国、各国レベルでの評価であろうと、今後は、なんとんでも環境面並びに衛生健康面を製品レベルでしっかりと考慮しながら評価を行うことになることは間違いないと思います。

そしてまた、今後、メーカー側としても、技術評価のための申請書類の準備が徐々に大変になってくる。特に中小企業にとっては、そうしたものは負担が大きくなってきます。そこで、私どもとしては、新しいサービスということで、そういう評価のための書類の準備といった、もっと上流部分からいろいろなサービスを提供する可能性が多く出てくるのではないかと考えています。

もう一つの考え方として、長いこと、こうした技術評価をする場合には、建材というか、部材としての評価をしていって、その性能をしっかりと特定していけば、ひいては建物の最終的な性能につながるのではないかと考えてきましたが、最近ではそのあたりの考え方が少し違ってきています。つまり、最終的な建物を視野に入れながらの製品技術評価に重きを置くようになってきています。

要するに、言い方を変えれば、製品そのものの質だけではなく、その製品が実際に現場で施工された場合、つまり、それを設置したときにどうなるかということまで考えての評価が大事になってきているということです。

スライド13

ヨーロッパにおけるこうした建設については、ヨーロッパの指令、ガイドライン、つまり法律があります。ところが、欧州連合としての指令、ガイドライン、法律はあまりにも複雑だし、実際にそれを利用していくのは難しいということで、EU委員会としては、指令や法律がそんなに面倒であれば、そのあたりをもう少し簡略化して、法律ではなくて規制、レギュレーションというレベルで物事に取り組みやすくしようと考えています。

でも、私が思うに、私の見解は間違っていないと思いますが、規制にしてしまったら、結局はもっと複雑化してわかりにくくなって、何が何だかぼやけてわからなくなってしまって使い勝手が悪くなるに違いないと思っています。その結果、2つ。

そうすると、メーカー側としても、本当に大変だということになると、CSTBさん、よろしくお願ひしますということで、もっとCSTBを頼って、もっと評価をしてください、承認をしてください、お宅さえいれば、ということになると思います。

だからといって、今から20～30年前のあの時代、認証機関同士はコミュニケーションが全

然なくて、話もしなかった時代に戻るとは思いません。いくら国レベルでの技術認証に対する需要が増えると、今度は、お互いにヨーロッパレベルで相互認証していこうということになると思います。つまり、その分、ヨーロッパのこういう認証機関同士がもっとパートナーシップを組んで、そして協力し合うようになっていく。その場合でも、ヨーロッパの柱となるような認証機関同士がパートナーシップを組んで、うちのCSTBなり、きょうの午前中に話が出たDIBtなど、そうしたところとの相互交流が増えてくると思います。

そうなりますと、今後いろいろできることがあるのではないかと思います。つまり、認証機関同士がお互いに相互認証という形での協定を結ぶとか、また、同じ技術承認を出す場合にも、一緒になって出していきましょうということで、協働作業で行うという手法。また、それ以外にもほかの手法を探っていくようになるのではないかと。つまり、自主認証制度も考えられるのではないかと考えております。

以上です。ご清聴、どうもありがとうございました。